

女人窟〈によにんくつ〉の行者〈ぎょうじゃ〉（篠山町）

篠山町火打岩〈ひうちわん〉に、最近（一九七一年）造成〈ぞうせい〉された鑄市〈つばいち〉ダム（つばいち）の南側にそびえる山の頂上近くに、奥行七メートルもある大岩窟〈がんくつ〉があり、地元ではこれを女人窟と呼んでいます。ここは、むかし、大岳山伏〈みたけやまぶし〉の行場〈ぎょうば〉の一つでもありました。

今から七百五十年も前のことです。このけわしい山中のもの恐ろしい洞窟〈どうくつ〉の奥で、朝夕小さな燈火〈ともしび〉をともし、一心に読経祈願〈どきょうきがん〉している白衣〈びやくえ〉の女人〈によにん〉がありました。村人達は、ただ人でないと気づき、あわれに思って、毎日食べ物を送りとどけるのでした。

ところで、鎌倉時代中期に「承久〈しょうきゅう〉の乱」という烈〈はげ〉しい戦〈いくさ〉がありました。それは、京都を中心として全国を統治〈とうじ〉していた皇室〈こうしつ〉と、武士を中心とした鎌倉幕府との間に起きた戦でありましたが、その結果は、皇室側の大敗戦となり、勝者鎌倉方の北条義時執権〈しつけん〉は、皇室方の戦の責任者の後鳥羽院〈ごとばいん〉を隠岐〈おき〉の島に、その第一皇子土御門院〈おうじつちみかどいん〉を土佐〈とさ〉の国に、第二皇子順徳院〈じゅんとくいん〉は佐渡〈さど〉が島に配流〈はいりゅう〉しました。

程なく、後鳥羽院は隠岐の島で、順徳院は佐渡が島で、それぞれただならぬなげきのうちに、死去されました。

話かわって、女人窟の白衣の女人は、一心に祈りをささげ、毎日読経に明け暮れていましたが、いつとはなしに、洞窟の女人は承明門院〈しょうめいもんいん〉であるとの、うわさが流れました。

承明門院は、実は後鳥羽院の皇妃〈おきさき〉であり、土御門院のご生母なのです。法勝寺の執行能円法印〈しゅぎょうのうえんほういん〉の女〈むすめ〉で「宰相〈さいしょう〉の君〈きみ〉」と呼ばれた才色〈さいしよく〉を兼ねた美人であったから、皇妃に選ばれたのでした。承明門院は、承久の乱後、夫君たる後鳥羽院が絶海の孤島に流されて死去され、わが愛子〈いとご〉土御門院が遠隔〈えんかく〉の辺境〈へんきょう〉に流されたのをかなしみ、美しい黒髪〈かみ〉をそり、一介〈かい〉の尼僧〈にそう〉となり、縁故〈えんこ〉を尋〈たず〉ね、都に近い人目に立たないこの火打岩の岩窟にかくれ入れたのでした。

そして、朝夕わが身を現世〈このよ〉から捨てて、はるかに大岳本堂や宝塔の諸仏〈しよぶつ〉に向って、夫君後鳥羽院のご冥福〈めいふく〉や愛子土御門院のご安泰〈あんたい〉や怨敵〈おんてき〉北条氏の調伏〈ちょうぶく〉などを一心に祈願せられ、御年八十三才で亡くなられたのでした。

今も女人窟の下に承明門院のお墓があり、里人のねんごろなおまつりが続けられています。